

宮本百合子選集

第五卷

百合子選集

第五卷

新日本出版社

宮本百合子選集 第五卷

1969年3月20日 初 版

1974年7月10日 第6刷

著 者 宮 本 百 合 子

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見 2 の13 の14

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話 東京 (265) 7 0 0 6 (営業)

(265) 2 0 7 5 (編集)

振替番号 東京 1 3 6 8 1

印刷・鎌倉印刷株式会社 製本・古賀製本株式会社

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

道標第一部	3
道標第二部	281
注	541

道

標

第一部

第一章

一

からだの下で、列車がゴットンと鈍く大きくゆりかえしながら止った。その拍子に眼がさめた。伸子は、そんな気がして眼をあけた。だが、伸子の眼の前のすぐそばには緑と白のゴバン縞のテーブルかけをかけた四角いテーブルが立っている。そのテーブルの上に伸子のハンド・バッグだの素子の書類入鞘だのがごたごたのついで、目をうつすと白く塗られた入口のドアの横に、大小数個のトランク、二つの行李、ハルビンで用意した食糧入れの柳製大籠などが、いかにもひとまずそこまで運びこんだという風に積みあげられている。それらが、薄暗い光線のなかに見えた。素子は伸子の位置からすればTの型に、あっちの壁によせてお

かれているベッドで睡っている。それも、やっぱり薄暗い中に見える。

ここはモスクワだったのだ。伸子は急にはっきり目がさめた。自分たちはモスクワへついている。

——モスクワ——。

きのう彼女たちが北停車場へ着いたのは午後五時すぎだった。北国の冬の都会は全く宵景色で、駅からホテルまで来るタクシーの窓からすっかり暮れている街と、街路に流れている灯の色と、その灯かけを掠めて降っている元気のいい雪がみえた。タクシーの窓へ顔をびったりよせてそとを見ている伸子の前を、どこか田舎風な大きい夜につつまれはじめた都会の街々が、低いところに灯かけをみせ、時には歩道に面した半地下室の店の中から扇形の明りをぱっと雪の降る歩道へ照し出したりして通りすぎた。通行人たちは黒い影絵となつて足早にその光と雪の錯綜をよこぎっていた。それらの景色には、ヨーロッパの大都市としては思いがけないような人懐こさがあった。

きょうはモスクワの第一日。——その第一瞥。——伸子はこみ上げて来る感情を抑えきれなくなった。ベ

ッドのきしみで素子をおこさないようにそつと半身おきあがって、窓のカーテンの裾を少しばかりもちあげた。そこへ頭をつっこむようにして外を見た。

二重窓のそとに雪が降っていた。伸子たちがゆうべついたばかりのとき軽く降っていた雪は、そのまま夜じゆう降りつづけていたものと見える。見えない空の高みから速くどっさりの雪が降っていて、ひろくない往来をへだてた向い側の大工事の足場に積り、その工事場の入口に哨兵の休み場のために立っている小舎のき、こ屋根の上にも厚くつもっている。雪の降りしきるその横町には人通りもない。きこえて来る物音もない。そのしずかな雪降りの工事場の前のところを、一人の歩哨が銃をつり皮で肩にかけてゆっくり行ったり来たりしていた。さきのとんがった、赤い星のぬいつけられたフェルトの防寒帽をかぶって、雪の面とすれすれに長く大きい皮製裏毛の防寒外套の裾をひきずるようにして、歩哨は行ったり来たりしている。彼に気づかれることのない三階の窓のカーテンの隅からその様子を眺めおろしている伸子の口元に、ほほえみが浮んだ。ふる雪の中をゆっくり歩いている歩哨は、あと

からあとからとおちて来る雪に向って、血色のいい若い顔をいくらか仰向かせ、わざと顔に雪をあてるような恰好で歩いている。若い歩哨は雪がすきらしかった。自分たちの国のゆたかで莊重な冬の季節を愛していて、体の暖い若い顔にかかる雪がうれしいのだろう。雪のすきな伸子には、歩哨の若者が顔を雪にあてる感情がわかるようだった。

「——ぶこちゃん？」

うしろで、目をさましたばかりの素子の声がした。伸子はカーテンをもち上げていたところから頭をひっこめた。

「めがさめた？」

「あーあよくねた、何時ごろなんだろう」

そう云えば伸子もまだ時計をみていなかった。

「八時半だわ」

素子は一寸の間黙っていたが、ベッドに横になったまま、

「カーテンあけてみないか」

と云った。伸子は、重く大きい海老茶木綿の綾織カーテンを勢よくひいた。狭いその一室に外光がさしこん

だ。雪のふりしきる窓の全景があらわれ、うす緑色の塗料でぬられている彼女たちの室の壁が明るくなった。しかし、その明るさは大きい窓ガラス越しにふる雪の白さがかえって際だって見えるという程の明るさでしかなかった。

「これじゃ仕様がな、ぶこちゃん、電気つけようよ」

スイッチを押し、灯をつけてから、伸子はドアをあけて首だけ出すようにホテルの廊下をのぞいた。くらい十二月の朝の気配や降る雪にすべての物音を消されている外界の様子が伸子にも珍しかった。廊下のはずれにバケツを下げた掃除女の姿が見えるばかりだった。廊下をへだてた斜向いの室のドアもまだしまったまま、廊下のはじめにニッケルのサモワール*が出してあった。サモワールは、ゆうべ秋山宇一が彼の室へとりよせて瀬川雅夫などと一緒に、伸子たちをもてなしてくれたその名残りだった。

ドアをしめて戻ると、伸子は腑におちない風で、

「まだみんな寝てるのかしら——」
と小声を出した。

「まるでひっそりよ」

「ふうん」

ゆっくりかまえていた素子は、

「どれ」

とおき上ると、わきの椅子の背にぬぎかけてあったものを一つ一つとって手早く身仕度をととのえはじめた。

二人で廊下へ出てみても、やっぱり森閑として人気がない。伸子たちは、ドアの上に57という室番号が小さい楕円形の瀬戸ものに書いてある一室をノックした。

「はい」

几帳面なロシア語の返事がドアのすぐうしろでした。素子がハンドルに手をかけると同時にドアは内側へひらかれた。

「や、お早うございます。さあ、どうぞ……」

ロシア革命十周年記念の文化国賓として、二カ月ばかり前からモスクワに来ていた秋山宇一は、日本からつれて来た内海厚という外語の露語科を出た若いひと

とずっと一緒だった。ドアをあけたのは、内海だった。

「どうでした——第一夜の眠り心地は……」

窓よりに置いたテーブルに向って長椅子にかけている秋山宇一が、ちょっとしゃれた工合に頭をうなずかせて挨拶しながら伸子たちにきいた。

「すっかりよく寝ちまった……なかなか降ってるじゃありませんか」

素子がそう云いながら近づいて外を眺めるこの室の窓は二つとも大通りの側に面していて、まうように降る雪をとおして通りの屋根屋根が見はらせた。

「今年は全体に雪がおくれたそうです。——四日だったかな、初雪がふったのは——」

すこし秋田訛のある言葉を、内海は、ロシア語を話すときと同じように几帳面に発音した。

「もう、これで根雪ですね。一月に入って、この降りがやむと、毎日快晴でほんとのロシアの厳冬がはじめります」

秋山も、はじめてみるモスクワの冬らしい景色に心を動かされているらしかったが、

「じゃ、瀬川君に知らせましょうか」

と、内海をかえりみた。

「朝飯前だったんですか」

「ええ。あなたがたが起きられたら、一緒にしようと思つて」

「まあ、わるかったこと」

きまりのわるい顔で伸子があやまった。

「わたしたち寝坊してしまつて……」

「いや、いいんです。私もだつて、さっき起きたばかりなんですから……しかしソヴェトの人たちには、とてもかないませんね、実に精力的ですからね。夜あけ頃まで談論風発で、笑ったり踊ったりしているかと思うと、きちんと九時に出勤しているんだから……」

そこへ、黒背広に縞ズボンのきちんとした服装で瀬川雅夫が入つて来た。日本のロシア語の代表的な専門家として瀬川雅夫も国賓だった。演劇専門の佐内満は十日ばかり前にモスクワからベルリンへ立ったところだった。

「お早うございます。——いかがです？ よくおやすみでしたか」

秋山宇一は無産派の芸術家らしく、半白の長めな髪を総髪のような工合にかき上げている。瀬川雅夫は教授らしく髪をわけ、髭をたくわえている。それはいかにもめいめいのもっているその人らしさであった。その人らしいと云えば内海厚は、柔かい髪をびったりと横幅のひろい額の上に梳きつけて、黒ぶちのロイド眼鏡をかけているのだが、その髪と眼鏡と上唇のうすい表情とが、伸子に十九世紀のおしまい頃のロシアの大學生を思ひおこさせた。内海厚自身その感じが気に入っていないらしいかった。

やがて五人の日本人はテーブルを囲んで、茶道具類とパン、バターなどをとりよせ、殆ど衣類は入っていない秋山の衣裳箆の棚にしまつてあつたゆうべのこのりの、塩漬胡瓜やチーズ、赤いきれいなイクラなどで朝飯をはじめた。

「ロシアの人は、昔からよくお茶をのむことが小説にも出て来ますが、来てみると、実際にのみたくなるから妙ですよ」

瀬川雅夫がそう云つた
「日本でも信州あたりの人はよくお茶をのみますね

——大体寒い地方は、そうじゃないですか」

もち前の啓蒙的な口調で、秋山が答えている。

うまい塩漬胡瓜をうす切れにしてバターをつけたパンに添えてたべながらも、伸子の眼は雪の降っている窓のそとへひかれがちだった。モスクワの雪……活々とした感情が動いて、伸子のところをしずかにさせないのであった。雪そのものについてだけ云うならば、ハルビンを出たシベリア鉄道が、バイカル湖にかかつてから大ロシアへ出るまで数日の間、伸子たちは十二月中旬の果しないシベリアの雪を朝から夜まで車窓に見て来た。それは曠野の雪だった。雪と氷柱につつまれたステーションで、列車の発着をつげる鐘の音が、カン、カン、カンと凍りついたシベリアの大氣の燦きのなかに響く。白い寂寞は美しかった。列車がノヴォシビルスクに着いたとき、いつものとおり外氣を吸おうとして雪の上へおりた伸子は、凍りきつてキラキラ明るく光る空氣がまるでかたくて、鼻の穴に吸いこまれて来ないのにびっくりした。おどろいて笑いながら、つづけて咳きをした。そこは零下三十五度だった。雪が珍しいというのではなく、こんなに雪の降る、このモス

クワの生活が、伸子の予感をかきたてたのであった。

食事も終りかかったところ、瀬川雅夫が、

「さて、あなたがたのきょうのスケジュールは、どういう風です？」

と、伸子たちにきいた。

「別にこれってきめてはいないんですがね」

きな粉色のスーツが黒い髪によく似合っている素子が答えた。

「大使館へでも一寸顔だしして来ようかと思っているんだけど。——手紙類を、大使館気づけで受けとるようにして来たから……」

秋山宇一は、黙ったままそれをききながら小柄な体で、重ね合わせている脚をゆすった。

「じゃ、こうなさい」

席から立ちかけながら、瀬川が云った。

「もう三十分もすると、どうせ私も出かけてBOKKへ行かなければならない用がありますから、御案内しましょう。BOKKは、いづれ行かなければならないところでしょうから」

「それがいいですよ。BOKKを訪ねることは、重要

ですよ」

濃くて長い眉の下に、不釣合に小さい二つの眼をしばたきながら、我からうなずくようにして、秋山宇一が云った。

「外国の文化人たちは、みんな世話になっているんですから」

「じゃ、それでいいですね」

瀬川が実務家らしく話をうちきった。

「BOKKからは大使館もじきです」

BOKKというのは、モスクワにある対外文化聯絡協会の略称であった。この対外文化聯絡協会は、ソヴェト同盟の各都市に支部をもっているとともに、世界の国々に出張している。伸子たちが旅券の裏書のことで東京にあるソ連大使館のなかに住むバルヴィン博士に会った。あの灰黄色の眼をした巨人のようなひとBOKKの東京派遣員であった。こんど、佐内、秋山その他の人たちが国賓として来ているのも、万事はBOKKの斡旋によった。

瀬川につづいて、出かける仕度に部屋へ戻ろうとする伸子たちに向って、茶道具がのったままのテーブル

のところから秋山宇一が、
「BOKCで、すごい美人がみられますよ。イタリアー語と日本語のほかはあらゆる国語を話すんだそうです。アルメニア美人の典型でね——ま、みていらっしやい」

笑いながらそう云った。

黒い羊のはらごの毛皮でこしらえたアストラカン帽をかぶり、同じ毛皮の襟のついた外套を着た瀬川雅夫について、素子と伸子とは雪の降る往来へ出た。ホテルの前の大きい普請場の入口を、いま一台の重い荷馬車が入りかけているところだった。歩哨の兵士のきているのによく似た裏毛の防寒外套の胸をはだけたまま、不精ひげの生えた頬つべたの両側に防寒帽のたれをばたつかせたまま、馬子は、

「ダワイ！ ダワイ！ ダワイ！」

と太い声で馬をはげまし、轅うづえのところへ手をそえて自分も全身の力を出しながら、傾斜した渡板のむこうへ馬をわたらした。ダワイということばは、呉れ、という意味だとならった。馬子は、いかにも元氣の出そう

な調子でダワイ、ダワイと叫んだけれど、それはどういう意味なのだろう。一足おくらせていた伸子に、

「ぶこちゃん！」

素子が大きい声でよんだ。ホテルを出たばかりの街角に三台櫓が客待ちしていた。その一台に、素子がのりかけているところだった。日本風呂敷に包んだ大きい箱のようなものをわきにかかえた瀬川雅夫が、素子と並んでかけた。

「ぶこちゃん、前へ立つんだよ」

「どこへ？」

「ここへ——十分立てますよ」

瀬川雅夫が、防寒上靴をはいた足をひっこめながら云った。

「ほんの六七分のところだから大丈夫ですよ。却って面白いじゃないですか。……ほら、こうして」

箱を素子にあずけ、瀬川は素子を自分の膝に半ばかけさせるようにした。

三人をつみこんで櫓は、トゥウェルスカヤの大通りへ向けていた馬首をゆっくり反対の方角へ向け直し、それから速歩で、家の窓々の並んだその通りを進みは

じめた。いかにも鮮やかな緑色羅紗に毛皮のふちをつけた御者の丸形帽に雪は降りかかり、乗っている伸子たちの外套の襟や胸にも雪がかかる。それは風のない雪だった。櫓はじき、トゥウェルスカヤの大通りと平行してモスクワを縦にとおっている一本の街すじへ出た。そこは電車の通っていない商店街だった。パン屋。本屋。食料品店。何をうっているのか分らないがらんとした幾軒もの店。ショウ・ウィンドウが一面白く凍っていて花の色も見えない花屋の店。店の前のせまい歩道では防寒用に綿入れの半外套を着、フェルトの長靴をはき、ふくらんだ書類靴をこわきにかかえた男たちが、肩や胸を雪で白くしながら足早に歩いている。茶色の毛糸のショールを頭から肩へかぶった女たちが、腕に籠をとおして、ゆっくり歩いている。向日葵の種をかねで、そのからを雪の上へほき出しながら散歩のようにゆく少年がある。その街は古風で、商店は三階建てで雪の中に並び、雪の匂いと微かな馬糞のにおいがしている。伸子たちののっている櫓は、国立音楽学校の鉄柵の前を通りすぎ、やがて右側のひろい段々のある建物の前へとまった。

三人で、その低い石段をのぼるとき、素子が何かのはずみで雪の上で足をすべらし、前へのめって、段々に手袋をはめた手をついた。素子はすぐ起き直った。そのまま表玄関に入った。

そこがBOKCの建物であった。防寒靴を下足にあずける間も伸子は深い興味をもってこの二十世紀初頭の新様式（ヌーボー）で建てられている建物を見まわした。いずれは誰かモスクワの金持ちの私邸として建てられたものだろう。表玄関からホールを仕切る大扉の欄間がステインド・グラスで、そこにはカリフォルニア・ポピーのような柔かい花卉の花が、大きくその蔓を唐草模様にして焼きつけられている。そのステインド・グラスの曲線をうけて、見事な上質ガラスのはまった大扉の枠も、下へゆくほどふくらみをもった曲線でつくられていて、華やかなガラスの花をうける葉の連想を与えられている。すぐとつきに、表階段があった。その手すりは大理石だが、それもヌーボー式のぬらりとした曲線で、花の蕊が長くのびたように出来ている。おそらくフランス風を模倣してつくられたものだったろう。けれども、生粋にフランス風なひき

しまった線は裝飾のどこにも見当らなかつた。あらゆる線の重さとその分厚さがロシア風で、この屋敷の豪華は、はっきり、ロシア化されたフランス趣味というものゝを語っているようだった。

対外文化連絡のための事務所として、この建物を選定したとき、モスクワのその關係の委員会の人々はみんなこの建物を美しいと思ひ、外国から来るものに、觀られるねうちのあるものと思つて選んだらう。でも、その人々は、この建物の華麗が、フランス風を模しながら、こんなにもずつしりしたロシア氣質を溢らしているという点の意味ふかい面白さ、殆どユーモアに近い面白みを、予測しただらうか。

伸子は、一層興味を動かされて、ホールの左手にある一室に案内された。そこが応接室につかわれていて、もう数人の先客が、いくらか褪せた淡紅色のカーパーットの上に自由にばらばらおかれている肘かけ椅子の上にかけていた。もとも、ここはやつぱり冬の客室につかわれていたらしく、曲線的なモーデリングのある天井は居心地よいように、暖い感じのあるように割合低く、奥ゆきのある張出し窓が通りに面している。

そこにシャボテンの鉢植がのつていた。入ったつき当りにも出窓があり、その前に大型の事務用机が据えてある。事務机はもう一脚、あまりひろくないその室の左手の隅にあるきりだった。そつちでは白いブラウスを着た地味な婦人が事務をとっている。

秋山宇一が特別注意した美人というのは、一言それと云われないでもわかるほど、際だった容貌の二十七八のアルメニア婦人だった。黒のスカートのうすい桃色のブラウスをつけ、美しい耳環をつけ、陶器のように青白い皮膚と、近東風な長い眉と、素晴らしい眼と、円くて、極めて赤い唇とをもつて、その室に入つたつき当りのデスクをうけもっているのがあつた。

「ああ、プロフェッソル・セガワワ！」

てきぱきした事務的な愛嬌よさでそのひとは椅子から立ち上つた。そして、手入れよく房々とちぢらした黒い髪を頸のまわりでふりさばくようにして、デスクのむこう側から握手の手をのばした。それと同時に、新しい客としてそこに佇んでいる伸子と素子の方へ、それぞれ笑顔をむけ、やがてデスクのうらから出て来て、握手した。

「これが、ここの事務責任者のゴルシュキナさんです」

そして、一人一人伸子と素子の専門と、ソヴェト旅行は個人の資格で来ていることを紹介した。

「ようこそおいでになりました」

美しいその人は、仕事に訓練された要領よさで、いきなり英語で伸子たちに向って云った。

「私たちは、出来るだけ、あなたがたの御便利をはかりたいと思います。——どのくらい御滞在になりますか」

素子が一寸躊躇した。伸子は、

「瀬川さん、すみませんが、こう返事して頂戴。私たちは旅費のつづく間、そして、ソヴェトが私たちを追い出さない限り、いるつもりですって——」

「それは愉快です」

ゴルシュキナは笑い出して、伸子の手をとった。

「じゃ、モスクワ観光も、あんまりいそがないおつもり、というわけでしょうか」

「もちろんいろいろな場合、御助力いただかなければなりませんけれど、まあ段々に——。わたしは早く口

シア語で蜜柑を買えるようになりたいんです」

「あら蜜柑がお気に入りでしたか」

こんどは伸子が笑い出した。ゴルシュキナは一緒に笑いながら、その黒い、大きい、睫毛がきわだって人目をひく眼に機智を浮べた。そして云った。

「ソヴェト同盟を半年の間見物してね。最後に、一番気に入ったのは塩漬胡瓜だ、とおっしゃったお客様もありました」

瀬川雅夫は、ゴルシュキナに、カーメネヴ夫人に会いたいと云った。

「一寸お待ち下さい」

ゴルシュキナは、もう一つのデスクにいる婦人に、ノートを書いてわたしながら、

「みなさんお会いになりますか？」

ときいた。

「どうです、丁度いい機会だから会っておおきなさい」

伸子たちにそう云って、瀬川は、

「どうか」

と、ゴルシュキナが書きいいように丁寧に吉見素子（ロ